

農業名人 (松茸名人)

ふじわら ぎへえ
藤原 儀兵衛
昭和13年生まれ
伊那市富県在住



親父に内緒で檜山と赤松山を交換した

昭和28年中学を卒業して、小諸の県立伝習農場に進んだ。山崎巖場長は、「百姓は(のことは)覚えることない、売ることを覚えよ」と諭した。伊那へ帰り、養蚕と稲作農家になってもこの言葉が胸に残っていた。

当時松茸は、消費地への流通手段がなく、夜行列車で東京へ行商にでる人に、少し持っていってもらうくらいだった。高遠町の商店が、新山へ自転車で買い付けに来るようになり、松茸が換金できるようになってから、一挙に何人もが山へ入るようになった。人の山でも何でもかんでも入って、かきとっては3cmくらいのキノコまで根こそぎ取ってしまう。それを見て「これからは、自分の山を持たなくては」と強く思った。親父に内緒で、自家で所有する檜山と人様の痩せた赤松山を、交換した。それを伝え聞いた姉が、心配して嫁ぎ先からたずねてきた。「山の中に住んでいるものは、山を生かした方がよい」という信念からだった。檜は60~70年かかって1回、松茸は毎年収穫できる。

所有林に加え、赤松の区有林を30町歩(30ha)借り受け、かれこれ45年、同じ山を世話している。借地は15年契約で更新している。区からは、年額70万円で借りてくれと言われたが、その何倍も支払った。「世界一高い山だよ、愛着があるんだ」と笑った。

松茸の大敵は、錫杖草(シャクジョウソウ)とキノコのケロウジ(タバコ老人)である。錫杖草は、日中でも薄暗く、風通しの悪い落ち葉の厚い山林で、多く出て、松茸のシロは数年で出なくなってしまう。7月中旬から下旬にかけて抜き取り、ナイロン袋に入れて林外へ持ち出す。これを3年繰り返せば、5年目頃から松茸も回復してくる。ケロウジは松茸の適地にシロを持ち、異常な早さで松茸のシロを食い潰す。3~4本見かけたら、地下のシロは畳4畳くらいの大きさとみてよい。今のところ剥ぎ取り絶やすしか方法がない。

松茸は、赤松の生きた根に菌根をつくり、痩せた土を好み、他の微生物との競争に弱い。どの家でも毎日燃料として薪1束と柴1束が必要であった時代には、松茸の好条件が維持された。山の手入れがされない今日、人工増殖を研究する時代に来ている。



これからは、新山森林クラブや富県グリーンツーリズム推進委員会の活動を通じて、都会の人と交流しながら、松茸発生林の管理をしていきたい。松茸の自然林を利用した栽培は、手の届くところに来ていると思う。